

〔書評〕

小泉 保 他編

## 『日本語基本動詞用法辞典』

## 1、はじめに

少し古い話で恐縮だが、『朝日新聞』に百目鬼恭三郎氏の署名で「読むための辞書から書くための辞書へ」という囲み記事の載ったことがあった(昭和五十六年十二月二十八日)。氏はそこで、イギリスにおける学習辞典寄りの英語辞書刊行の実態を紹介し、結びとしてわが国の国語辞書に目を向けて、次のように述べている。少し長いが引用する。

外国人にとって、英語は、読むより書くほうがずっとむずかしいから、学習辞典もいきおい書くのに役立つように作られている。それがコトバの使い方の説明にあらわれているわけだが、英語国民が学習辞典を使うようになったのは、彼らの自国語を書く能力が外国人並みに低下してきたということなのである。日本でも、国語能力の低下を考えるなら、用字辞典のワクを超して、コトバの使い方まで指示した、書くための辞書が作られなくてもいいのではあるまいか。これまで、辞書は読むためのものに偏りすぎていた。

つまり、外国人の日本語学習用に役立つような、文作りの拠り所

になり得る辞書こそ、国語力の低下した現在、必要とされる辞書の姿ではないかとの意見と読み取れる。

森 田 良 行

日本語の表現パターンは述語中心に展開し、しかも「何々」が(ど)うかスル/シタ」という動作表現の物語り文が発想の主軸であるから、動詞に焦点をしばって、動詞述語の文型の雛型を記述しておけば、文作りのかなりの部分がカバーできることになる。百目鬼氏の言う「文作りに役立つ辞書」は、日本語では、動詞文型を射程に置いた動詞用法辞典が最もそれに近いことになるであろう。氏の記事が出てすでに八年経つが、(それ以前も含めて)現在までに動詞述語の文型表は幾種か発表されているが、語義と結びつきたいいわゆる動詞辞典の体裁を取っているものは、情報処理振興事業協会技術センターの『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (Basic Verbs)』を除いてほかには見当たらない。が、これはその道の専門家の利用に即した編集方針の辞書で、一般の学生・生徒や外国人の日本語学習者向きに作られていない。在来の国語辞典に近い形で解説が施されている比較的取り付きやすい平易な動詞辞典という意味では、ここに取り上げる『日本語基本動詞用法辞典』が最初であろう。その意味で本辞典の持つ意義は大きいのであるが、同時にこの種の辞書

のさき、げとして、今後の発展の叩き台的役割を宿命的に担っていると云わなければならない。というわけで、長所も欠点も、今後の動詞辞典作成の指針や参考とすべき重要な資料を提供しているわけである。では、次にその内容を見ていくことにしよう。

## 2、全体の構成

編者は小泉保・船城道雄・本田昴治・仁田義雄・塚本秀樹の五氏であるが、序文によると、日本語動詞の結合価の分析を目的として研究チームを結成したのがそもその始まりであったという。その後、調査研究を重ねるうちに辞典編集の企画へと発展し、具体的な記載内容のモデルの作成、およびそれに従って二十二名の研究協力者による原稿執筆、さらに編者による作成原稿の洗い直し、と作業を重ねて、一冊の辞典の形にまとまったという。採用見出し語数は七二八語。五十音順に並び、各語ごとに、まず「意味・文型」の欄を設けて、意味内容から(1)(2)(3)……と意味分類をし、そのそれぞれに総括的な意味を掲げ、取る文型として、たとえば「挨拶する」なら

(人) (が／は) (人) に (因) と 挨拶する

のように、見出し語動詞が述語として取り得る文型、すなわち動詞が取る格形式のパターンと、それぞれの格に立つ名詞句の意味特性(意味素性)を(一)で括って示す。同じ意味のまとまりの中に二種以上の文型が見出される場合は、さらにa・b・c……で下位分類する配慮がなされている。すべて文型中心に記述が整理されているところが従来の辞書と違う点の一つだろう。それぞれの分類項ごとに幾つかの簡単な用例が挙げられているが、すべて作例と思われる。意味と文型の解説が一通り終わると、次に(文法情報)の見出しの

下に、受身・使役・可能・相(ヘアスペクト)・意志・命令と禁止の六項目について、その用法の有無と例文ならびに文法上の注記が続き、さらに(語形)の欄を設けて、その動詞の語形変化の形「否定形・連用形・過去形・中止形・くば条件形・くたら条件形の六つの活用形を記載する。「行く」なら、(否定) いかない(連用) いき(過去) いった……のように、かなり形式的だが、これは「日本語学習者の便宜を考慮して」と断り書きを施しているところを見ると、外国人の日本語学習の参考資料との意図があるらしい。その他、見出し語によっては(複合動詞)の欄に主な複合語例を意味・例文つきで掲げているが、これは従来の国語辞典の域を超えていない。「出す」なら「出し抜く」のような見出し語動詞の先行する場合だけで、「作り出す」や「泣き出す」のような後統する複合例は扱っていない。外国人相手なら、むしろこちらのほうが重要である。その他(慣用句)(類語)の欄もあるが、類義語辞典ではないので、特に類義語との意味・文型面での比較は一切見られない。ただ類語を挙げるにとどまる。

以上(意味・文型)から(類語)までの六つの段階に項目を分けて解説ないし用例が挙げられ、巻末に付録として、用言・助動詞の活用表と常用漢字・人名漢字の一覧表とを添える。動詞の用法辞典に漢字表は不似合だが、文作りに役立つ辞書という観点からのサーピスであろう。

## 3、見出し語について

基本語あるいは基本動詞と銘打った場合、いちばん問題になるのは数量的にどの程度まで採り上げるか、それと実際に取り出す語彙

の内訳だろう。本辞典では、見出し語動詞総数七二八語。たとえば時枝誠記編『例解国語辞典』（第三六版、昭和四八年四月）中に現れる動詞が四、六二二語であることを目安に考えると、約六分の一弱だが、先の「計算機用日本語基本動詞辞書」の収録語数が八六一語、

朝倉日本語新講座の第三巻「文法と意味Ⅰ」中の「日本語用言の結合価」に収められている文型表の動詞数が一、一五四語である点を考え合わせると、まず妥当な数と言つてよからう。ただし「挨拶する」や「がつかりする」のような複合サ変動詞が一六七語を占めるから、普通の和語動詞は五六一語。評者の勤める大学の日本語初級教科書では、それが三一八語であるから、右の数は中級の前半段階の数と言つてよからう。外国人はともかく、日本人にとつてはやや物足りない数と思われる。そのため、基本動詞と言つても、たとえば「おさめる」「伴う」「とる」「除く」など重要語が落ちているのが気になるし、また、語義と文型との関連に重点を置くなら、採り上げられていない語の中にも、たとえば「汲む」が、「桶で水を汲む」と「桶に水を汲む」、さらに「事情を汲む／意味を汲む」と、文型によつて、汲み上げたり、汲み入れたり、推測したりするように意味の分かれる、無視できない問題語だし、同様「ふさぐ」も、「机が場所をふさぐ」「板で穴をふさぐ」「心がふさぐ」と、「物が所を満たす」『通路を閉ざす』「憂鬱になる」のように文型が語義に深くかかわつてくる注目すべき語なのだが、このような語の抜けていることにも気づく。

それに比べて、「安心する」「案内する」など漢語サ変動詞は、百六十数語も収められているが、この種の語は概して意味領域も狭く、文型面でもさほど複雑ではない。「字音語十する」は「愛する」「感

じる」があるが、これらも含めてこの辞書の編者は、語義・文型の問題性よりも、各格に立つ名詞句中の体言の意味特性の指示、それに、より基本的な動詞を優先的に選ぶというこの二点に重きを置いたのであろう。それも一つの見識である。

#### 4、意味・文型の扱いについて

この辞典の中心は何と言つても意味・文型の分析と記述にある。だが、一見したところ、意味面の分析は、その動詞の意味内容を大分類するためのもののように、個々の記述は語義の大枠をとらえるにとどまり、ねらいはむしろそれぞれの意味枝に属する文型の分析と、各格に立つ名詞の意味特性の記述にあるようである。その点が森田「基礎日本語」（後、三巻を合本して「基礎日本語辞典」と改称）と大きく異なるところである。そのため、たとえば「命令する」では、まず全般的な意味として、

〔意味・文型〕(1)目下の者に何かを行うように言つたり、強制したりする。

と一括説明ですむ語でも（ここで(1)とあるが、後に(2)(3)があるわけではない。語義分類の要のない場合でも、(1)と打つのがこの辞典の方針のようである）、文型的見地からは実に細かく。

〔文型 a〕(人・組織) (が／は) (人・組織) に〔事・活動〕を命令する

〔文型 b〕(人・組織) (が／は) (人・組織) に〔○〕ことを命令する

〔文型 c〕(人・組織) (が／は) (人・組織) に〔○〕よう (に) 命令する

〔文型d〕(人・組織) (が/は) (人・組織) に〔と〕と命令する

(例文はすべて省略した)

と詳しく一つ一つ分けて記述する態度に貫かれている。文型中心の記述がこの辞典の際立つ特徴だと言つてよからう。この態度は、この辞典企画のそもそもの出発点が、日本語動詞の結合価分析の研究チームにあることから十分にうなずける。編者の一人、仁田義雄氏は、つとに動詞の格支配に関して精力的に研究を進めている学究だし、先の計算機用の動詞辞書の作成にも、ワーキンググループの一員として関与している事実からも、本辞典の編成に文型文法の視点が行きわたつていて当然であろう。この点は、「計算機用基本動詞辞書」を除いては、従来の国語辞書に見られなかった特徴で、本辞典を世に問う意味もかかつてこの一点にあると言つてよい。問題は、それがどのように語義分類や語義分析に生かされているかである。

文型が異なれば解説も分けるとは言つても、たとえば「選ぶ」の項で、〔文型c〕と〔文型d〕は

(1) いくつかのものの中から、条件・目的に合うもの、または、好ましいものを取り出す。(中略)

〔文型c〕(人) (が/は) (人) に (人・物) を選ぶ

〔例〕娘が私にこのネクタイを選んだ・息子に嫁を選ぶ

〔文型d〕(人・組織) (が/は) (人・物・事) を (人・物・事)

に選ぶ

〔例〕委員たちは加藤氏を次期委員長に選んだ・新人候補を市長(知事)に選ぶ・大安の日を結婚式に選ぶ・銀の食器を引出物に選ぶ

〔用法1〕〔文型c〕の「く」に」と「く」を入れ換えると不自然になる。

〔用法2〕〔文型d〕の「く」を「は」を選ぶ対象となる物事を言い、「く」に」は選ばれた結果としての物事を言う。

と例文が並ぶだけで、文型の差が「選ぶ」の意味特徴にどう左右するかまでは言及しない。森田「基礎日本語1」では、文型cに当たる説明として、

特定の対象Bのために、Bの諸条件に合うものDを捜すこと。

「息子に嫁を選ぶ」、「に」格は、「……:」に対しての意。□の「選ぶ」は「選択する」の意。

とし、文型dに当たるところは

「親友の妹を妻に選ぶ」「隣の娘を息子の嫁に選ぶ」「加藤氏を次期委員長に選ぶ」(中略)「D二」の「に」格は「……:」として、多くの対象の中から、EをDに相当するものとして選り分け、決める。□の「選ぶ」は「選定する」の意である。

と、文型の違いによる意味差を強調する。その点「用法辞典」のほうは、あくまで文型と例文と用法上の注意の列挙に徹している。なお、〔文型c〕のネクタイの例文は「このネクタイを(私用に)選んだ」で、むしろ〔文型d〕に入れるべきではないか?

徹底した文型の分類と提示の細かさの特徴であると言つても、それぞれの作業過程でどれだけ生の用例が集められ文型分類に反映されているかは、序文や解説からはつまびらかでない。挙がっている用例は、「加藤氏を次期委員長に選ぶ」と固有名詞まで先行書をつくりの例のあるところを見ると、恐らくすべて作例であろう。そのため、実際の文章中に現れる動詞の格支配のパターンが本辞典の分類

項目の中に見出されないということが稀に起こる。評者の手元の用例カードで探ると、「触れる」の実例として、

この大規模な公式料理をどのような順序で進め、また、頂くか——興味のあるところだが、実際は勅使は「物も料理を手に触れず、まず最初は、……」

(平野雅章「将軍家の正月料理」)

というのがあがるが、本辞典の「触れる」の項には該当する文型が見当たらない。「意味・文型」欄には次のようにある。

《文型 a》「人」(が/は)「(身体部分・物)」に「(身体部分)」を触れる

【例】弘はピアノに手を触れた。(以下略)

《文型 b》「人」(が/は)「(身体部分)」で「(身体部分・物)」に触れる。

【例】素手でむき出しの電線に触れると危険だ。(以下略)

《文型 c》「(身体部分・物)」(が/は)「(身体部分・物)」に触れる。

【例】(前略)・手が電源に触れる。(後略)

a は意志的行為で他動詞。b も意志的行為だが、自動詞。c は無意志性の行為や現象で、自動詞である。一方、「一物も料理を手に触れず」や「プレゼントの包みを手に触れようともせず」はどうだろうか。

「人」は「物」を「(身体部分)」に触れる

「く」に触れる」だから自動詞だが、全体で「く」を手に触れる」と

他動詞性の句を構成する。もちろん意志的行為である。これは先の a b c のどの文型にも当てはまらない。凡例に「基本動詞について、その意味とすべての用法を示したものである」と述べているところ

を見ると、これは規範的な用法でないとの判断から意図的に除外したものが、それとも初めから気づいていなかったものか。

## 5、意味特性の指示について

ところで、右の《文型 b》の雛型は

「人」(が/は)「(身体的部分)」で「(身体部分・物)」に触れると表示し、デ格には「(身体部分)」とうたつて「素手で」「足で」の例を掲げる。「触れる」や「さわる」「叩く」など対格を要求する動作動詞の場合、直接接触のみなのか、物を介した間接接触も可能なのか、これは意味記述上の大問題であつて、なおざりには出来ない。右例は

棒の先でこわごわ蛇の尻尾に触れる。

と言えるのであるから、デ格は必ずしも「(身体部分)」と限定するわけにはいかない。このような点を除いても、それぞれの格に立つ名詞句の内容を意味的に規定していくことは意外と難しく、体系立てて組織的に記述していくためには、名詞を意味的にどのような分類し類型化していくかの一貫した視点が要求される。

名詞句を構成する体言の意味特性からどのような範疇として規定していくかは、その格の箇所立ち得る範疇的關係を持つ語群の顔ぶれによって決めていくしかない。これは極めて難しい問題で、「表現」とのからみで、述語動詞と統合的關係を取り得る名詞の範囲(名詞句に対する意味的制限)を規定しなければならない。編者の小泉保氏も「序」で

文型における意味特性の設定には苦慮した。例えば、「知り合いの娘を嫁にもらつた」に対する文型を「人」を「(役割者)」にも

らう」と定めたが、「知り合いの娘」に「人」という一般の意味特性を与えるのはいいが、「嫁」の箇所は、「婿」か「養子」ぐらいの語に限定されるので、「役割者」という具体的な意味特性を割り当てることにした。

と苦心のほどを叙している。本辞典では「人」（生き物）以下四十九の広範な意味特性に分類して、さらに細かい下位分類を施している。これは新しい成果として本辞典の価値を高めている。

だが、いかに入念な規定を行っても、やはり問題は生ずるものである。「やぶる」の解説を見よう。

(1)物を裂いたり、穴をあけたり、壊したりする。

〔文型〕(人・生き物・組織・機械)が／は(物)を破る

〔例〕彼は手紙を破る・本のページを破る・ふすま(障子)を破る・ズボン(シャツ)を破る・ダンプカーが壁を破った・ドアを破る・ライオンがおりを破る・金庫を破る・網を破る・田みを破る

(1)の意味記述で「破る」を「物を裂く／穴をあける／壊す」とあるが、後の例文で「本のページ」「金庫」「田み」といった属性面で全く異質の名詞が並ぶと、各々が冒頭の意味記述のうちどれに相当するか、混乱する。初めの「引き裂く」では「手紙」から「シャツ」までと「網」を含めた名詞語彙で、共通の意義素として「薄い・平たい・膜状か幕状のしなやかな曲げられる弱い材質・具体物」と規定できる。一方、「壁」「ドア」「おり」は「穴があく」ことで、へしなやかさに欠ける膜状か板状のもので、遮蔽物・具体物」という属性の名詞に限られる。これらを一括(物)とすることは、ヲ格に立つ名詞の意義素の違いに目をつぶることになるし、「破る」の意味記

述の上からも問題があらう。まして「田みを破る」となると、「バリケード・提防・防護フェンス」のように障害物となる(具体物)という属性も備える一方、「包囲網・防御線」などと同じく、かなり抽象的な、障害となる(事)の概念が強まる。これまでも(物)の範疇に含めることは、実用を旨とした用法辞典としては問題があまりはしまいか。日本語に不慣れな外国人には、正しい使い方は理解できないし、ヲ格に立つ名詞と「破る」との意味関係もつかめないであらう。

## 6、むすび

このように細かく見ていけば種々問題点はあるにしても、文型に着目した新しい試みの辞書として大いに注目されてよい労作と言えらる。冒頭に引用した百目鬼氏の言葉にもどるが、これからの辞典は外国人の学習者にも役立つ「書くための辞書」、文を作っていくために必要な文法的・語彙的情報を細かく盛り込んだ辞書でなければならぬ。そのためには、文型中心の動詞の用法だけでなく、他の品詞へと拡大する要もあらうし、語のレベルを超えて句の用法にまで広げることにもなる。いづれにしても本辞典の出現によって、今後の国語辞典は新たに文型の扱いが義務づけられることになるであらうし、そのための拠り所として本辞典の果たす役割は量り知れない。用法辞典の一里塚を進んで築かれた編者・執筆者に心から敬意を表したい。

(平成元年三月一日発行 大修館書店刊 菊判 六二〇ページ 四八〇〇円) — 早稲田大学教授 —